大学院時代を振り返る

山下尚一

大学院時代を振り返ると、「自分はあせることのできない院生だったなあ」と感じます。私が提出を遅らせることになった修士論文を、同じ第１期生のＳ君が順調に提出していても、あるいは私が採択されなかった学術振興会特別研究員の資格を、別の同期のＳ君が獲得していても、あせることはありませんでした。私には、「自分が納得できる論文を自分のペースで出すこと、これを地道につづければきっと将来につながるはずだ」というよくわからない確信がありました。

そのように自分の納得できる論文を自分のペースで発表できたのは、本誌『文化交流研究』ができたからであり、その母体である「文化交流研究会」ができたからです。

私たちが修士論文を提出し、論文を投稿できる学会誌を探しはじめていた、そのようなときに、分野の先生方が発案してくださいました。「この分野内にも院生の投稿できる雑誌があるほうがよい、そのためにはまず母体となる研究会をつくるのがよいのではないか」。そこで私たちも研究会の準備に取りかかり、研究会係、研究会誌係、連絡・調整係といった役割を分担しました。私は、先生と院生のあいだの連絡・調整をおこなっていたような記憶があります。先生方にいろいろな手つづきをご相談申し上げ、お忙しいなか日程を調整していただき、第１回の研究会総会にこぎつける、これが私の役割だったように覚えています。まわりの院生は、別の学会や研究会の規約をもらってきて参考にしたり、会誌の校正のための例を執筆したり、大学から近くて安い印刷業者を探したり、会誌の表紙のデザインを考案したりしていました。私としては、研究会を立ち上げていく準備期間はとても楽しかった記憶があります。まあ、これはもしかしたら、私が大変な仕事をしていなかっただけなのかもしれませんが……。

私の働きぶりはあやしいものですが、先生方やまわりの院生のおかげで「文化交流研究会」が設立され、『文化交流研究』が創刊されました。それは、あせることのできない私にとって、非常にありがたい研究成果発表の場になりました。ぜひ、現在の院生のみなさんにもこの場を活用して、自分の納得する論文を自分のペースで発表してほしいなあ、そう思っています。